

## 教師の仕事とは

大阪教育大学・木原俊行

### 1. 自己実現している教師に共通する点

「教師の仕事とは？」という問いに簡潔に答えることは、極めて難しい。ある教師の1日を追ってみると、それが分かるだろう。彼（女）が、朝早くから夜遅くまで、予想以上にたくさんの活動に従事していることを確認できるはずだ。それは、教職の特徴の1つ、「無境界性」として、概念化されている。<sup>(1)</sup>

けれども、教職に生きがいを感じ、学校で自己実現を果たしている教師たちの仕事ぶりには、重なる部分があるようにも思う。筆者は、毎年、たくさんの学校を訪れ、そこで何十人という教師たちの授業を見学しているが、その経験から、教職を満喫している教師たちには、少なくとも次のような共通点があると実感している。それは、「子どもに対する重要な他者としての教師」「授業のクリエイターとしての教師」そして「実践共同体の一員としての教師」という姿である。以下、それらを詳述する。

### 2. 子どもに対する重要な他者としての教師

#### (1) 教師と子どもの相互作用的成長

読者は、「重要な他者」あるいは「意味ある他者」という概念をご存知だろうか。それは、「(前略)個人の自己形成上、特に重要な意味をもつ人物、すなわち個人が自分に対するその人の態度や評価、期待に特別な注意を払い、それに合致するよう行動し、結果的にそれに即して自己イメージをつくり上げる、そうした相手となる人物のことを指している」。<sup>(2)</sup>

子どもは、教師に、親や兄弟等のように、自分にとって「重要な他者」として存在してくれることを期待している。自分を愛してくれる、自らの言動を見つめている、自分とのコミュニケーションを図ってくれる人であってほしいと願っている。つまり、1人ひとりの子どものためには、教師に果たしてほしい役割、その基本は、自分と密に関わってくれることなのだ。

そして、そういう期待や願いに応えてくれる人だからこそ、教師の言葉を信じ、彼（女）の示す課題に挑戦するのである。教師が子どもたちに多少厳しい態度で接しても、それが自らの成長を信じ、それを実現しようとして起こしているアクションなのだと思うれば、彼らは努力を重ねる。

そして、当然のことながら、子どもの成長の事実は、

教師に、効力感をもたらす。子どもたちの期待に応えよう、そのための努力を欠かすまいという気持ちをいっそう強くする。そうした意味では、実は、子どもは、教師にとっての「重要な他者」である。

このような信頼関係が築かれ、両者が相互作用的に成長している教室では、教師や子どもの優しい笑顔をたくさん見ることができる。

#### (2) きめ細かな指導の必要性

社会状況の様々な変化の中で、残念ながら、家庭等において「重要な他者」を見つけられず、満たされぬ思いを抱えて学校にやってくる子どもが増えている。習い事やゲーム等の普及などから、友人との関わりが不足している子どもも少なくない。彼らは、家庭等で満たされていない分、なおいっそう、教師たちに「重要な他者」の役割を果たしてもらいたいと乞う。しかし、残念ながら、彼らは、それを伝える術を知らない。

それゆえ、これまで以上に、教師から子どもたちに積極的にアクションをかけることが必要になる。それが、「きめ細かな指導」である。そして、その徹底を図るために、いわゆる少人数指導やチーム・ティーチングの導入が推進されているのである。<sup>(3)</sup>

### 3. 授業のクリエイターとしての教師

授業づくりは、とても創造的な営みだ。だから、教師には、クリエイターの資質が求められる。

#### (1) 授業デザインにおける裁量

まず、授業の計画、つまり授業デザインには、かなりの裁量が認められている。周知のように、わが国の学校教育活動は、学習指導要領にもとづいて進められる。これには、法的拘束力があるからだ。けれども、その叙述は、あまり具体的ではない。目標や内容、指導の留意点等がリストアップされているだけである。

それゆえ、教師たちは、担当する子どもたちの学力を高めるために、学習過程や準備物等を具体的に検討せざるをえない。教科書に準拠した指導書などは、参考にはなるだろうが、目の前の子どもたちにフィットするとは限らないから、そのまま実施することはできないし、また、望ましくもない。

授業のデザインは、面倒な作業ではある。何をどのように指導すべきかを誰かが明快に示してくれたら、そしてそのとおりに指導できるならば、どんなに楽だろう。そう考える場合もあるかもしれない。けれども、決められたことを「こなす」だけの仕事は一般に、やりがいが大きくない。人は、ロボットではないから、やはり、仕事においては自分なりに工夫を凝ら

してみたいと願うものである。教職は、それが十分に認められている。

#### (2) 授業中の即興

どんなに授業の準備に熱を込めても、子どもは、教師の思惑どおりには学ばない。いや、子どもが教師の予想を超えた姿に至ることは、むしろ奨励されて然るべきことである。

教師は、授業中に、子どもの反応をとらえ、即興で授業デザインを再構築しなければならない。これもまた、大変なことのように思える。準備した教材が使えなくなったり、子どもから「分からない」という嘆きが出てきたりすれば、確かに気落ちするだろう。

けれども、だからこそ、授業に臨む教師に、緊張感が生まれる。子どもの反応を見逃すまい、次の一手はどうしようという、集中力も高まる。一般に、人は、予想に反する事態に遭遇し、その問題解決に取り組む際に努力するし、それが成長を促す。筆者は、授業が動的な性格を宿していることは、教師の仕事が単調さから解放してくれるものであり、むしろ、やりがいを与えてくれるものであると考えている。

### 4. 実践共同体の構成員としての教師

#### (1) 学校における共同

教師の仕事には、学校という組織の一員としての活動も含まれる。それには、学校行事等の教育活動から、コンピュータ教室の利用調整といった事務的なものまで、かなり多様なものが存在する。

教室は「学級王国」であると言われることもあるが、同時に、(意外にも)学校には教師間の共同を必要とする状況がたくさんある。そして、その質も様々だ。

秋田は、教師文化の類型を紹介しつつ、「同僚性」を基盤にした教師文化のあり方やその可能性と課題を説いている。<sup>(4)</sup>そして、「プロジェクトのような形で、その時々目的や必要に応じて、力動的に集団のあり方が変化し、時に集団同士が重なりあったり、さまざまな形で教師同士が互いにつながりあう」スタイルの教師文化の可能性を指摘している。

そうした柔軟で、しかも機能的な同僚関係は、どのようにして構築されるのであろうか。

#### (2) 教師同士の磨き合い

教師の仕事の支柱は授業の計画・実施・評価であるから、教師間の連携や協力も、当然、それを舞台とするものが重視されるべきであろう。つまり、教師たちは皆、授業づくりを共同で探究する共同体、実践共同体の構成員なのである。

わが国の教師たちは、昔から、学校を単位として、あるいは自主的にサークルを組んで、授業づくりに関する意見交換を繰り返してきたし、その成果を記録に残したり、発表会等で披露したりしながら、共有してきた。それは、世界に誇る教師文化であるし、授業づくりに関する仲間との磨き合いが豊かであることは、それが子どもたちに望む姿と整合的であるという意味で、教職の基本的な性格である。<sup>(5)</sup>

今日の教師たちは多忙化や社会の要求等に遭遇し、あえでいる。けれども、だからこそ、教職の本質的な営み、その可能性を再確認すべきである。それは、授業を舞台とする、子どもとの相互作用であり、それを充実させるための仲間＝同僚との研鑽である。どんな時代や状況にあっても、この営みを尊重する精神があれば、教師の仕事は常に魅力ある業であり続けるはずだ。

#### 注

(1) 佐藤学(1994)「教師文化の構造」稲垣忠彦・久富善之編『日本の教師文化』東京大学出版会、pp.21-41

(2) 飯田浩之(2002)「意味ある他者」『新版 現代学校教育大事典1』ぎょうせい、pp.121-122

(3) 木原俊行(2004)「豊かな学力の育成に資する学習指導と評価」木原俊行編『[学習指導・評価]実践チェックリスト』教育開発研究所、pp.10-15

(4) 秋田喜代美(1998)「実践の創造と同僚関係」佐伯胖他編『教師像の再構築』岩波書店、pp.235-259

(5) 木原俊行(2006)『教師が磨き合う「学校研究」』ぎょうせい